

2020年4月30日(木)

老球の細道539号

4月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

雪の少ない冬を過ごし何か変だなと思っていたら、今度はコロナが到来して人生最大の危機を迎えている。最も季節感を感じる今の時期、いつのまにか冬が終わり、いつのまにか春も終わろうとしている。バスケの大会がほとんど中止になり、中、高校の3年生には気の毒なことになってしまった。今後バスケット関係者にとって、大会がなくてもバスケを続けるモチベーションはあるか、バスケットボールへの愛情の真価が問われるところである。

1・テレビから

◆「芸術とは一人の人が意識的に何か外に見えるしるしを使って、自分の味わった気持ちを他の人に伝える。他の人がその気持ちに感染してそれを感じるようになるという人間の働きだ。芸術によって同じ時代の人たちの味わった気持ちも、数千年前に他の人たちが通ってきた気持ちも伝わるようになる。芸術は今生きている私たちにあらゆる人の気持ちを味わえるようにする。そこに芸術の務めがある」〈BS・NHK：映像の世紀・トルストイ〉：

日常から芸術が亡くなっていく日々。改めて痛感する「無用の用」。

2・読書から

◆「人に迷惑をかけない”生き方を目指すのではなく”あなたと人が幸せになる”生き方を目指すのです」〈鴻上尚史著『空気を読んでも従わない』岩波ジュニア新書〉：

新入生が入部してきた時の挨拶で最も多いのが「先輩の足を引っ張らないように・・・」。「先輩を引っばって行くようにがんばります」と言えるルーキーが欲しい。

◆「あるところであきらめることで平安を得たくない。あきらめず、捨てず、いつまでも追求し、そのうえでほんとうの平安と満足とを得たい。ほんとうに不死の仕事をした人には死はない」〈志賀直哉著『暗夜行路』河出書房〉： コーチの神様・ジョン・ウッデンも言う。「成功とは最善を尽くしたときの満足感から得られる心の平安」だと。たどり着きたい心境は「命日が定年」。終わり笑えればすべてよし。まだまだ続くバスケットボールを極める日々。

◆「待て望め忍べ励めの四の字 あさな夕なにわれくりかえす(土井晩翠)」〈早川喜代次『白虎童子回想録』白虎記念館〉： 祖父の若い頃に親交のあった「♪荒城の月」の作詞者が著者の手紙に書いた言葉。バスケットボールの指導ができない今の私にぴったり。

3・新聞から

◆「強制的にさせられる努力はもろいのです」〈朝日：折々のことば・横尾忠則〉：

どの道でも努力の天才が最後に勝つ。義務としての努力は続かないが、遊びとしての努力は長続きする。アスリートにおいても最高の素質は「楽しんで努力できる」能力だと思う。

◆「恐れるべき唯一のものは、恐れそのものだ」〈朝日：日曜に想う〉： 安倍首相が米国元大統領ローズベルトの言葉を借用。アベノマスクでなくタイガーマスクの言葉のようだ。